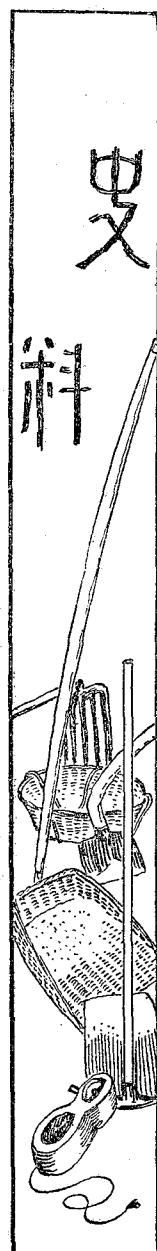


# 東海道行脚

〔十二〕

田中好



熱田

熱田、今は名古屋の構成分子だが、明治四十年市域に編入される迄は獨立した町であつて、徳川時代には宮とも呼ばれ、東海道五十三驛の内で八ヶ間敷驛立てられた。併しがれ以前王朝時代の東海道は今のは違つて山手の方を通つてゐたから延喜式の驛制などは此處熱田には無関心だ、尾張志は熱田の昔を洗ひ立てゝ云つてゐる。王朝時代

の古驛ではなくて、武家が政を執るやうに爲つて、京都と鎌倉へ通ふ道筋に當つてから旅宿も出來たことは、吾妻鏡や源平盛衰記乃至は古軍書紀行に載せられてゐるが、今

繁昌には及ばない。享祿年代の神宮圖を見ても、南の方には陸地が渺く濱邊のやうに推し測られるから、三四百年以前までは家並も多くは無かつた。其の後追々海を埋立てゝ町家と爲つたけれども、家作は粗雑で旅宿は詰らぬものが多かつたと見え、明暦二年の東海道の道中記は「なるみ宿

惡しみや宿惡し」と書いてゐる位だ。と言つてゐる。

そう言つてしまへば熱田も値打が下るやうだが、神代記に、草薙劍、今は尾張國<sup>アマガシワカニ</sup>吾湯市村、即熱田祝部所掌之神是也、とある吾湯市村が今の熱田だから、假令東海道の交通に關係は無かつたにしても熱田神社のお蔭で有名だつた。だから鎌倉時代以降東海道を旅した數知れぬ澤山人々が、熱田のことを物語らぬ人はない位に爲つた、併し夫れは伊勢の桑名から海路を熱田に來た時代と、陸路を熱田に來た時代とに依つて旅人の感想も違ふ譯だ。東海道の古きを尋ねる私の旅は少し堅苦しいかも判らないが、東海道舊路線を究めることにしたい。

八ヶ間敷囃し立てゝゐる景行天皇の御代、日本武尊の東征の順路は尾張國の美夜受比賣の家から駿河の焼津を経て相模國の三浦郡に出て、足柄峠を越えて信濃國を廻つて亦尾張國へ歸られた。足柄峠を越えたか上野國碓日峠を越えたのかは史家の研究に委せて、兎も角尾張國に一度は歸られたものだ、夫れから先きの順路が私の旅する東海道の

古き路線を究めるのに必要だ。

古事記は、於是詔。茲山神者徒手直取而、騰其山之時。白猪逢于山邊。其大如牛。爾爲言舉而詔。是化<sup>ニ</sup>白猪<sup>者</sup>者。其神之使者。雖今不殺。還時將殺而騰座。於是零<sup>ニ</sup>大冰雨。打<sup>ニ</sup>惑倭建命<sup>之</sup>使者。當<sup>ニ</sup>其神之正見<sup>レ</sup>惑也。故還下坐之。到<sup>ニ</sup>玉倉之清泉。以息座之時。御心稍寤。故號<sup>ニ</sup>其清泉<sup>謂居寤清泉也</sup>。自<sup>ニ</sup>其處<sup>發</sup>。到<sup>ニ</sup>當藝野上<sup>之</sup>時詔者。吾心恒念<sup>ニ</sup>虛翔行。然今吾足不得步<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>當藝形。故號<sup>ニ</sup>其地<sup>謂當藝也</sup>。自<sup>ニ</sup>其地<sup>ニ</sup>差小幸行。因<sup>ニ</sup>甚疲。衝<sup>ニ</sup>御杖<sup>ニ</sup>稍步。故號<sup>ニ</sup>其地<sup>杖衝坂</sup>也。到<sup>ニ</sup>坐尾津前<sup>一</sup>松之許。先御食之時。所<sup>ニ</sup>忘其地<sup>ニ</sup>御刀。不失猶有。爾御歌曰。……自<sup>ニ</sup>其地<sup>ニ</sup>幸<sup>ニ</sup>到<sup>ニ</sup>三重村<sup>之</sup>時。亦詔<sup>ニ</sup>之吾足如三重勾<sup>ニ</sup>而甚疲<sup>ニ</sup>。故號<sup>ニ</sup>其地<sup>謂三重</sup>。自<sup>ニ</sup>其幸行而到<sup>ニ</sup>能煩野<sup>之</sup>時。思<sup>ニ</sup>國以歌曰。……と傳えてゐる。之に依ると伊吹山を征伐されたときは、尾張國を立出で<sup>ニ</sup>居寤清泉、いまの醒ヶ井を経て、當藝之地、美濃國多藝郡を通つて今も伊勢國三重郡内部村にある杖衝坂を越え

られ、當時尾津の前と言はれた桑名郡多度村を通りて三重  
村に出られたのぢや、だから當時の東海道は尾張國から美  
濃に出て伊勢路に這入つたのであらう。

大寶令では東海道を中路と定めて大路山陽道の下に置い  
たけれども、諸國給鈴條には三關の定めを設けて、伊勢の  
鈴鹿や美濃の不破に關所を設け交通を取締つた。當時は大  
和に都があつたのだから大和から伊賀伊勢を通つて尾張に  
出たものと言ふのが間違のないところであらう。聖武天皇  
が恭仁京に遷都されてから東海道の順路は動きだした。

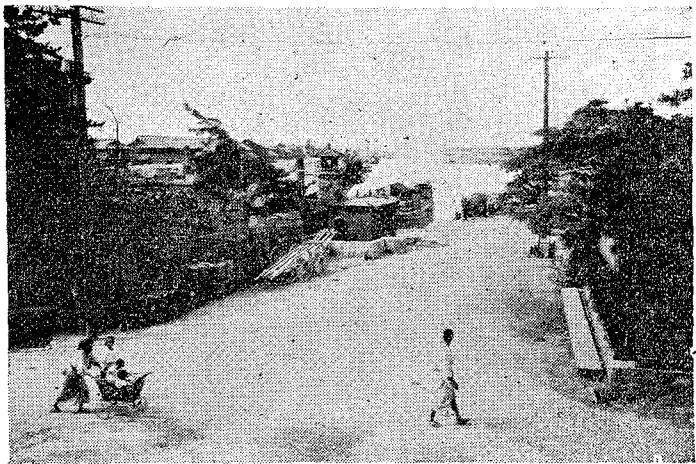
帝都の所在の變るにつれて變るのは當然であるからだ。併  
し官道としての東海道が驛遞志稿が傳えてゐるやうに、聖  
武帝十四年二月始て恭仁京東北の道を開て近江國に通した  
ものとすりや、此頃から近江路に出て伊賀に渡つたものだ。  
桓武帝が都を平安に遷されてからは、伊賀路に依ると不便  
なので近江路を草津に出て、鈴鹿を越え伊勢に出たものぢ  
や、併し伊勢から此處熱田までの順路はどれを辿つたか、  
例の業平朝臣の伊勢物語は、伊勢尾張の間の海面を往くに

波の甚白く立を見て、甚だじく過ゆく方の戀しきに羨くも  
返る波かな。と詠んでゐる。業平の物語が史上に重きを置  
かれない想像的なものであるにしても、其の時代の旅物語  
を基礎にして旅心を詠んだものと推察するのが自然の考え  
だから、矢張り伊勢尾張の間は海を渡つたと見るのが本當  
を基礎にして旅心を詠んだものと推察するのが自然の考え  
であらう。

延喜式が定めた此區間の東海道の驛馬を見ると、伊勢國  
に榎撫と言ふのがある。尾張國では馬津、新溝、兩村と言  
ふのがある。榎撫驛が今の桑名であつたことは疑は無いが  
尾張國の馬津驛が今何處に該るのかと延喜時代の東海道  
の路線を見定めるのに必要ぢや、地名辭書の所説を拜借す  
るとコ一だ。

馬津、今詳ならず、古驛名にして東海道の官渡なれば市  
駅(今之市江?)の邊とおもはる、蓋中世洪水の漂蕩する所  
と爲り、地形其舊を失へる歟、一書に津島に松川てふ字あ  
れば、彼地ならんと説くも、津島にては餘りに北に迂回す  
るやの疑あり、津島市駅相去る一里半。後記、弘仁三年五

月、伊勢國言、傳馬之設、唯送新任之司、其外無所乘用、今自桑名郡榎撫驛、達尾張國、既是水路、而徒置傳馬、久成民勞、伏請、一從停止、永息煩勞、許之。とある榎撫は蓋今の桑名驛なるべければ、其水路を経て来るべき尾張の初驛は、延喜式に、當國、驛馬、馬津、新溝、兩村両十疋、傳馬、海部郡、愛智郡、各五疋とあるに參照して、其の海部郡馬津なるを悟るべし、兩村驛は愛智郡沓掛なれば、新溝は其中間なる熱田の邊たること又推斷すべし。此渡は永祿元年尾張國司解文にも、依無馬津渡船、以所部小船、並津邊人令渡煩（中略）早津邊可置渡船等也、海道第一之難所、官使上下留連處也ともありて、赤染



家集には、尾張國へ下りしに（中略）うまつと云所にとまる、夜かり屋におりて涼むに、小船に男二人計乗り漕渡るを、何するぞと問へば、冷かなるをもゆを汲みに冲へまかると云へり。とも記す、三代格に、草津渡とあるも、草は馬の誤にあらずや、一説草をカヤとよみ、萱津かと云へり、されど萱津は渡船大ならず、世に著るのべき渡頭にあらず。

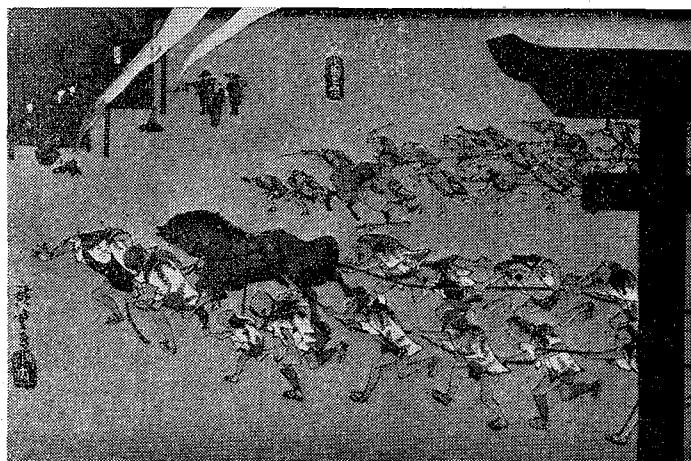
コト言つてゐるから此處の東海道は、木曾掛斐長良の三川に悩まされて桑名から木曾川の対岸に渡つたことは確實だ。夫れから新溝驛が熱田であつたかドーかは疑問であるにしても、其の驛の次驛が前に物語つた兩村驛、今の尾張國豊明村沓掛であるから、平安朝時代の東海道は、伊

勢の桑名から木曾川左岸の市江に渡つて東へ行つたことは確實だ。

夫れに寛仁時代に旅した、菅原孝標の女の更級日記は、尾張國鳴海浦を通つてコト傳えてゐる。美濃國になる境に、すのまたといふ渡りして、野上といふ所につきぬ、

そこに遊びども出て來て、夜一夜歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、哀れに戀しき事限りなし、雪ふりあれ惑ふに、物の興もなくて、不破の關、あつみの山など越えて、近江國おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり、みつさかの山の麓に、よるひる時雨霰降りみだれて、日の光もはさやかならず、いみじう物む

疋、篠原、清水、鳥籠、横川各十五疋、穴太五疋、和糸三疋かし、そこを立ちて犬上、神崎、野洲、くる本などいふ所



所何となく過ぎぬ、湖の面はるべ  
として、なでしま、竹生島などいふ  
所の見えたる、いとおもしろし、瀬  
多橋皆崩れて渡りわづらふ、栗津に  
とどまりて十二月一日京に入る。と  
言つて、此處宮——熱田を物語らな  
いで美濃の墨俣に立寄つて近江路を  
京に出てゐる。併し延喜式の宿驛は  
前に物語つた順路であるのに孝標の  
女が美濃路に出たから、私も當時に  
於ける近江や美濃の驛を調べない譯  
に行かないであらう。

延喜式に表はれた近江國や美濃國  
は、東山道に屬してゐて、近江國驛  
馬、勢多三十疋、岡田、甲賀各二十  
疋、篠原、清水、鳥籠、横川各十五疋、穴太五疋、和糸三

疋、くる本などいふ所  
尾各七疋、朝結各九疋。美濃國驛馬、不破三疋、大野、方

縣、各務各六疋、可兒八疋、立坂、大井各十疋、坂本三十疋、武義、加茂各四疋と錄してゐる。近江國の穴太や和奈係はないが、今其の他の地名を辿つて路線を見てみると、瀬多は栗田郡瀬田村宇老上、岡田は栗田郡志村追分、甲賀は今地名判らないが水口町附近であらう。篠原は栗田郡野路驛と相並んで野路の篠原宿と呼ばれてゐるが、延喜式篠原は野州郡篠原村、清水は神崎郡老蘇村清水鼻、鳥籠は坂田郡鳥居本村、横川は坂田郡醒井村、美濃國驛不破は不破郡關原村松尾、大野は本巣郡鷺山村、方縣は本巣郡合渡村、夫れ以下は私の旅に關係しないから暫く省略するが、之を見ると、中仙道も東海道と同じやうに待遇されてゐたのだから街道も悪くなつたらしい、で旅人は鈴鹿峠が嶮岨であるのと、今昔物語集が物語つてゐるやうに、鈴鹿山で蜂が盜人を蟻し殺したと言はれる程に、盜人が出て交通に不安があるのやら、木曾掛斐長良の原始河川が亂流して船路に依らなければならなかつた苦痛を免れる爲に、中仙

道を通るやうに爲つたのだらう。併し官道としての東海道は之が爲に變更されなかつた。

平治物語は、義朝青墓に落着く事を記して、今の滋賀縣草津町の野路——昔の野路驛から守山に出て鏡宿——今の滋賀縣鏡山村を通つて、不破關は敵固めたりとて小關にかかりて小野宿より海道をば馬手になして落ち給ふ。と言つて小野宿から岐阜縣の青墓の宿に著いてゐる、人の情を呼んでゐる平家物語の海道くだりも亦、逢坂山うち越えて、勢多の唐橋、駒もとゝろと踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞にくもる鏡山、比良の高峰を北にして伊吹の嶽も近づきぬ、心をとむとしなけれども、荒れてなかく、優しきは、不破の關屋の板廬、いかに鳴海の潮干潟、涙に袖はしそれつゝ。と言つて不破關を越えた、鎌倉時代の旅日記は何れも此の道路を探つたのだ、で此の時代の東海道旅行は、滋賀縣の野路の宿で鈴鹿越えの伊勢路と岐れて不破の關を越え愛知縣萱津——今の海部郡萱澤村に來て伊勢路と合つて關東へ下つたのだ。

貞應の海道記は、矢張近江路を探つて野洲川を通つて、夜景に大岳といふ所にとまる。と言つてゐる、大岳は今の大口の東にある大岡山で夫れを出て鈴鹿山にかゝつて。すべて此の山は一山の中に數山をへだてて千巒の峯にさはり一河のながれ百瀬に流れて衆客の歩みに足をひたせり、山里江複は當路に有りといへども、萬里の行者はなかばもいたらず。と言つて薄暮に鈴鹿の關屋に泊つてゐる、翌日市脇に泊つた、市脇、夫れは今愛知縣海部郡市江村であつて佐屋川と木曾川との合流點にあつた市脇島だと言ふことではあるが、當時の旅として鈴鹿から木曾川附近までを一日の行程はやゝ疑はしいが、桑名から渡船に依つたのではないらしい、夫れは市脇に着くまでの感想を述べて。かくて邑里に出で、田中の畔を通れば、左に見右に見、立田渺々たり。と言つてゐるから陸路を探つたらしい。市脇を立つて木曾川にある津島の渡を渡つて、尾張に着いてゐる、同じ鎌倉時代の旅日記、東關記行や十六夜日記の主人公でも矢張り伊勢路にはいらなかつた。此の様な次第で平安

朝時代からの東海道は漸次中山道に變更したものだ。夫れが慣に爲つて室町時代に這入ると、伊勢路は捨てられた。大乘院の記録に依る、應仁二年十二月十五日自京都至鎌倉宿次第。を見ると、大津、勢田、野路、守山、鏡、武佐、蒲生野、愛智川、四十九院、小野、馬場、佐目伽井、柏原、居增、山中、垂井、赤坂、墨股、黒田、折戸、萱津、熱田、鳴海と言つた調子に變つたものぢや、佐目伽井、柏原、居増、山中、垂井、赤坂、墨股、黒田、折戸、萱津、熱田、鳴海と言つた調子に變つたものぢや、徳川時代になつては、例の五街道の制を設けて伊勢路を探つた、で徳川時代からは奈良朝時代の東海道に復活したのぢや。

○

上古から徳川時代までの東海道の二線に就て物語つたが、徳川時代は此處熱田から桑名へ七里の間を船渡りをしたものがちや、其の渡を七里の渡とも言へば間遠の渡口とも言はれた、東海道名所圖會の言つてゐる所に依ると、間遠渡口。桑名七里の渡口をいふ、むかし、天武天皇大友皇子に襲はれ給ひ、尾濃へ亂を避け給ふ時、此の渡口船の着岸過ぎゆ

ゑ、間遠なりと宣ふ、此の由縁により名に呼ぶ、勢尾二州の國境なり、渡口七里の間風景斜ならず、西南に朝熊、二見浦、鳥羽の湊、東北には三遠の浦々遙に見えて、眞砂の海路なり、風つよく海荒き時は、佐屋へ廻るべし、又吾妻より登る時は、神守より津島へ行き天王社へ詣し、下船にのるも可なり。と言つてゐる、だから徳川時代の旅日記、丙辰記行でも、熱田から海路七里渡りて伊勢國桑名に至る。

と錄して、天武天皇不破の戰を物語つて、天皇は伊勢太神宮に參詣ましくて祈らせ給ひ、それより此の桑名に渡御なりて美濃にかかり、近江路を經て還行なりぬ。と言つてゐる。東海記行や歸家日記は、皆官道を傳つて七里の渡を越えたものぢや、併し當時でも船に因る連中は陸路を木曾が熱田に泊つて。

亭主「イヤ明日はお船でござりますか、又佐屋廻りをなされますか。北八「直に爰から舟にしやう。彌次舟は能

いが、おいらアどうも、船ではなぜか小便をするのがこはくて、そして根つから出ねへには困る、七里乗るといふもんだから、堪へては居られず、どぶしたものだらう佐屋へ廻らうか、ノウ北八。

と問答をしてゐるから徳川時代でも佐屋廻りをした旅人とあつた筈だ。

## ○

熱田——宮。七里の渡の渡口であつた堀川には今も熱田港常夜燈が建てられてゐる、併し夫れは徳川時代のものぢや、夫れ以前は古渡と言ふのがあつて、其處から船出した。古渡に付ては、地名辭書の言ふところを拜借すると。古渡、今名古屋の市區へ入る、日置の南とす、東古渡は改めて古澤村と云ひ、僅に存す、古渡は熱田の北なる古驛にして延喜式、新溝驛とあるも此かとおもはる、其の渡の名義は河海に因み、昔は愛智潟の潮江は、熱田の西の北の方へ浸して、此の邊まで入りしならん、後世地形變じ、此なる渡津は廢し、宮の渡を以て海道の往來したるにより、古渡と

云ひ、其の昔の名を残したるか。と言つてゐるが、徳川時代に船が出たのは矢張り今残つてゐる堀川を慶長十六年六月に堀つて舟入りとしたからだ。今も熱田・傳馬町の角に寛政甲戌二年に建てられた、道標が残されてゐる。夫れには「西、東江戸かいどう北なごやきそ道。北、南京いせ七里の渡し、是より北あつた御本社二丁」と記されて徳川時代の東海道を教えるのも、街道の昔を探して居る私の爲には何となふ強きを覺へる。

明治の時代となつて、東海道を一等道路としたが、夫れは矢張り徳川時代の路線を採つて船で桑名に渡つたものであつた、併しうれでは交通が不便ぢや、渡船で辛棒せなければならぬのも木曾・斐長良の三川があるからだ、そこを渡船に直せば交通の便益を増すと言ふので、漸く明治二十五年になつて路線を陸上に採るやうになつたのだ。

私は是から明治時代の國道を旅するであらう、市内の國道は名古屋築港に行く電車のお蔭で街も擴がつてゐる近代

的な道路と言つても可いが、夫れを西に折れると、幅二間位な貧弱な街道だ、熱田・前新田と言はれて新たに新田を造つたときに拵へた道だから流石に直線だが、交通物體を考慮へ無かつたか路幅の狭いのと路面が悪いのと餘り役には立つてゐない、幹線道路と言はるゝものが是位だから下之一色町から名古屋へ行く電車が敷かれたのであらう。夫れから先は百曲街道と言はれてゐるやうに屈曲が多い、夫ればかりではない此の地一帯は數知れぬ大小河川が伊勢湾に流入してゐる勢で、湿地だ、お蔭で満潮時に水が出やうものなら一面の泥海となつて國道交通は杜絶する、併し土人は幼いときから泥川に育つた勢か、小舟を下駄のやうに操つて水上の交通に満足してゐて自動車交通の難有味なぞは知らない、是だから東海道は昔のまゝだ。

大名古屋の都市計畫區域は、木曾川左岸にまで伸びて、私の旅する東海道を名古屋の放射幹線道路として造ることに爲つたが、例の財政難で其の計畫は晝餅に終らうとしてゐたときに、幸か不幸かは知らないが、世は不景氣風に見

舞はれて失業者が簇出する、何とかして之を救濟せなれりやならぬ、夫れで東海道を改良して此事業に失業者を使ふことと爲つた、今内務省の手で蟹江と彌富の間延長一里十二町を幅員六間に改良中だ。名古屋と蟹江の間は政府の工事に引續いて縣が改良することに爲つてゐるから此處一二年で名古屋から木曾川までは近代道路が出來る譯ぢや、併し此不景氣ではどうやら一年限りで失業者が無くなる様子も見えない。政府が失業者を助けなければならぬやうな不景氣は眞平御免を蒙りたいのぢやが、是に事を詰けなければ道路の改良が出來ないので情けない。

## ○

現在國道の悪いのを託しながら木曾川に出る、尾張名所圖會は、木曾川、水源は信州島居崎より出て、濃州を経て桑名の海まで五十里の長流にして水勢劇し、栗栖に至つてはじめて尾張に入る、此あたり川中に、奇石怪岩疊々としてそばたち、古木森々と茂りて風景他に異なり。實に蜀江の碧水もかくやあらんとおははかる。と言つてゐる、ど

この阿呆かは知らないが、此風景地を日本ライン何て和洋折衷の名を附けて喜んでゐる、昔からの名を忘れるやうな自尊心の乏しい國民も困つたものぢや、併し夫れは夫れとして、此川が吾々社會に與えて呉れた惠澤は隨分大きなものだが併し其の害悪も亦尠くない、東海道は之あるが爲に昔から旅人は憐まされ、東海道の路線が幾度か變更されたのだ、其のお蔭で今も此處木曾川は渡船で交通してゐる。大正の時代に爲つて國道の改良が八ヶ間敷言はれ、木曾川の架橋も幾度か問題に爲つた、併し此處に橋を架けるのは愛知縣の利益に爲つても三重縣の利益とはならぬ、イヤ矢張り三重縣も亦利益を受けると、兩縣が昭和の御代にあ

るまじき封建の思想で争つて架橋の相談が成立したなかつたが、漸く昭和二年に之も解決して、長さ四百八十六間、幅四間、ワーレン型の鋼構橋を工事費三百十二萬圓で架けることに爲つて之も工事中ぢや。

こゝ二三年待てば立派な橋が架けられるのを樂にして、渡船の厄介に爲つて長島へ上陸する、長島は木曾川と長良

川とに挟まれた島だ、今も女郎屋のあることに依つて名高い、東海道は女郎屋町を通りぬけて長良川に出るのちやが、街の中の海道は幅員一間半、夫れに屈曲が多いので自動車交通は之が爲に悩まされてゐる、で長良揖斐の架橋と相俟つて國道を改良することに爲つてゐるが、お氣の毒なことにには女郎屋街は海道から捨てられるのだ。

木曾川と相並んで旅人を悩ました揖斐と長良川、實際は一つの川であつて一橋を架ければ可いのだが、長さが六百六間もあるので困難なのだ、今は工事費二百六十八萬圓で幅四間の鋼製補剛構付繋拱橋を架けてゐる。是も一二年で出来上つて上古からの交通難も除けるかと思ふと、何となく嬉しい。

今は矢張り昭和の時代であるだけに、發動機船を渡船に使つてゐる。先に物語つたやうに桑名と名古屋間の道は明治二十五年に國道に認定された、夫れ以前は今の彌富警察署前から長島村迄地元の人が渡船を經營してゐて、不便であつたので沿線地方の人は國道に爲つたことを喜んだので

あつたが、唯だ夫れだけでは交通上に何の效果もないと言ふことで、茲揖斐長良には縣が渡船を經營しやうと言ふ事を爲つて、明治二十六年四月一日から晝は船四隻夜は二隻でお客や荷物を運ぶことに爲つて、國道に認定された價値を示すことに爲つた。當初は普通の小船を使つたが、昭和五年から發動汽船を使つて無賃で貨客を運んでゐる、私も夫れのお厄介になる。

